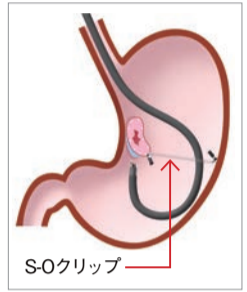


湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の永田充・内視鏡内科部長は、胃がんのESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）でのS-Oクリップの有用性を示す原著論文を、消化器内視鏡分野のトップジャーナルである米国消化器内視鏡学会（ASGE）の『Gastrointestinal Endoscopy (GIE)』に投稿、2021年5月号に掲載された。



「胃ESDの海外での普及の一助に」と永田部長



S-Oクリップで粘膜を把持し、治療時間を短縮

永田部長は、胃がんのESDに関し、従来法とS-Oクリップを使用した方法を比較した。ESDは、がん細胞の浸潤が粘膜下層までにとどまる早期の消化器がんを、電気メスで内視鏡的に切除する手技。S-OクリップとはESDを行う際に、視野確保と手技時間短縮を目的に粘膜を把持するデバイス（器具）だ。

まずS-Oクリップの胃ESDでの使用法を標準化し、内視鏡と干渉しないための方法を詳しく説明。さらに同院で実施したS-Oクリップ使用群と従来法群の症例を、信頼性の高いランダム化比較試験を用い比較した。その結果、胃ESD施行時間（中央値）が従来法群では52.6分だったのに対し、S-Oクリップ使用群では29.1分と統計学的に有意に短縮。穿孔は両群ともに発生しなかった。

米消化器内視鏡学会誌に原著論文

胃ESDは難易度が高く、時間が長くなる傾向にあるため、海外ではまだ普及していないのが現状だが、論文では施行時間の大幅な短縮を示し、同手技の難易度が下がったことを強調した。

論文掲載にあたり永田部長は「胃ESDは低侵襲で患者さんに有用な治療法です。今回の報告により、胃ESDの海外での普及の一助になることを期待しています」と抱負を語っている。論文の概要はYouTubeでも説明している。



論文の概要はYouTubeでも解説

現在では院内の感染対策を強化しつつ、ワクチン接種に尽力。6月中旬に65歳以上の高齢者の方々が終わり、7月以降は基礎疾患を有する方や高齢者施設などの従事者を対象に行っている。藤田院長は「若年者までワクチン接種が終わり、集団免疫を獲得することで、少しでも日常生活を取り戻せることを願っています」と期待感をあらわにする。

「離島・へき地の病院こそIoTを積極導入すべき」と期待感をあらわにする。遠隔診療支援システムは、19年度に総務省の「オンライン診療の普及促進に向けたモデル構築にかかる調査研究」に協力した際に導入された。同調査の背景には、厚生労働省が18年3月30日に「オンライン診療の適切な実施に関する指針」を公表し、同年4月の診療報酬改定で「オンライン診療料」を新設したことなどが関係している。



訪問診療で遠隔診療支援システムを活用する藤田院長

同院は24年に新築移転する予定。新病院では感染症の患者さん専用のエレベーターを設置するなど感染対策にも配慮。また、新規に緩和ケア病室を3床、HCU（高度治療室）を8床、回復期病室を38床設置し、診療機能も拡充する計画だ。

徳之島病院

島内クラスター制圧に奔走

「遠隔診療支援システム」活用



藤田院長は厚労省指定オンライン診療研修修了

院内感染は起こさず終息

徳之島では12月1日に新型コロナウイルス陽性者が発生、徐々にその数を増やし、9日にクラスターとして認定された。最終的に60人超の陽性者を確認。徳之島病院は、保健所からの要請で派遣された医師に加え、応援に駆け付けた福岡徳洲会病院の感染管理認定看護師、一般社団法人徳洲会医療安全・質管理部の野口幸洋・課

長補佐らと共に終息に向け奔走した。徳之島病院はクラスター発生期間、毎日、数件の行政検査に対応。陽性者は鹿児島県本土の病院に次々と搬送されたが、それでも間に合わず、ゾーン（区域分け）して6床のコロナ専用病床を用意。陽性患者さんと接触するスタッフの数を抑えるため、この期間は医師、看護師共に同病室の専従となり、主に軽症の患者さんに対応した。患者さんの管理にはセコム「Vitalook」を活用。



遠隔診療支援システムでコロナ患者さんの生体データを管理

藤田安彦院長は「スタッフがレッドゾーン（汚染区域）に入る回数が減り、PPE（個人防護具）着脱の負担軽減に加え、感染対策にもつながったと思います。スタッフの頑張りもあり、院内感染を起こさず終息しました。今後もコロナの患者さんが入院する際には、遠隔診療支援シ



クラスター終息に奔走したコロナ専用病床のスタッフ

「オンライン診療料」を新設したことなどが関係している。実際には同診療の立ち上げ方法などがわかりにくく、とくに地域全体での同診療の開始には地域戦略・地域ルール（方法論）が必要とされることから、総務省では複数の地域で同調査を実施した。同調査は、効率的な手順の明確化、地域で展開可能な実施参照モデルの

構築、IoT（モノのインターネット）機器を活用した疾病管理の検証などが目的。18年度には全国の4医療機関、19年度には徳之島病院を含め3医療機関が協力した。同院では実証期間中に在宅療養中の患者さん25人に対し、オンライン診療を実施した。藤田院長は「この調査でIoTの重要性を再確認しました。マンパワー不足解消、医療の質向上などを図るために、離島・へき地病院こそ積極的に導入するべきだと思えます。調査を終えた直後に

また、藤田院長は20年5月30日に厚労省指定オンライン診療研修を修了した。同研修では医師がオンライン診療を実施する際に必須とされる指針や情報通信機器の使用、情報セキュリティなどに関する知識の習得を行う。同院は今後も主に訪問診療でオンライン診療を活用していく。

藤田・徳之島病院院長 研修医に英語論文の執筆を推奨！ 学術活動強化し離島から知見発信

徳之島徳洲会病院の藤田安彦院長は、同院で地域医療研修を行う研修医に対し、研修中に英語論文の執筆を行うよう積極的に促し、離島発の学術活動に力を入れている。

7月には、2020年10～11月に同院で研修を行った奈良県立医科大学の田辺愛結2年次研修医（当時）が執筆・投稿した英語論文が、著名なオンラインジャーナル『Radiology Case Reports』に掲載。藤田院長も共著者として名を連ねている。テーマは「気腫性膀胱炎（EC）に特徴的に見られる高エコーリング～症例報告と文献レビュー～」。

ECは細菌感染によって産生されたガスが、膀胱壁内・内腔に貯留する比較的新な尿路感染症の一種。診断は単純X線撮影やCT（コンピュータ断層撮影）による画像診断を行い、抗生剤の投与などで治療する。治療しなかった場合は、膀胱破裂や腹膜炎を来し生命にかかわる疾患だ。

検討した3症例のうち90代の女性患者さんのケースでは、超音波検査を行い膀胱壁に沿うように高エコーリング（リング状に白く見える）を確認。その後、CT検査でも膀胱壁にガス像を確認しECと診断。こうした画像所見から、超音波検査で膀胱壁に高エコーリングを呈した場合、鑑別診断としてECを考慮すべきと結論付けた。

藤田院長は「これまで、ほとんど発表例がない新しい知見を提示したことが高く評価されたのだと思います」と目を細める。このほか研修医の英語論文としては、最近ではオンラインジャーナル『Case Reports in Gastroenterology』に、上腸間膜動脈解離に対する外科的治療戦略をテーマとしたものが掲載された。

また藤田院長は「離島病院でも臨床のみならず、世界に新たな医学的知見を発信する学術活動ができることを示したいと考え、取り組んでいます。それが魅力ある病院づくりにつながり、ひいては徳之島で働くことを希望する医療従事者の増加につながると期待しています。将来的には海外の大学や病院とオンラインで結び、カンファレンス（症例検討会）などもできるようにしたい」と抱負を語っている。

同院は建物の老朽化のため新築移転計画を進行中だ。24年以内に竣工、25年に診療開始を予定している。新病院では「結い（人と人が信頼し合い、共に何かを共創する）」の精神を柱に地域密着型病院を目指し、より一層、健康寿命の延伸に貢献する考え。災害に強い病院も志向する。